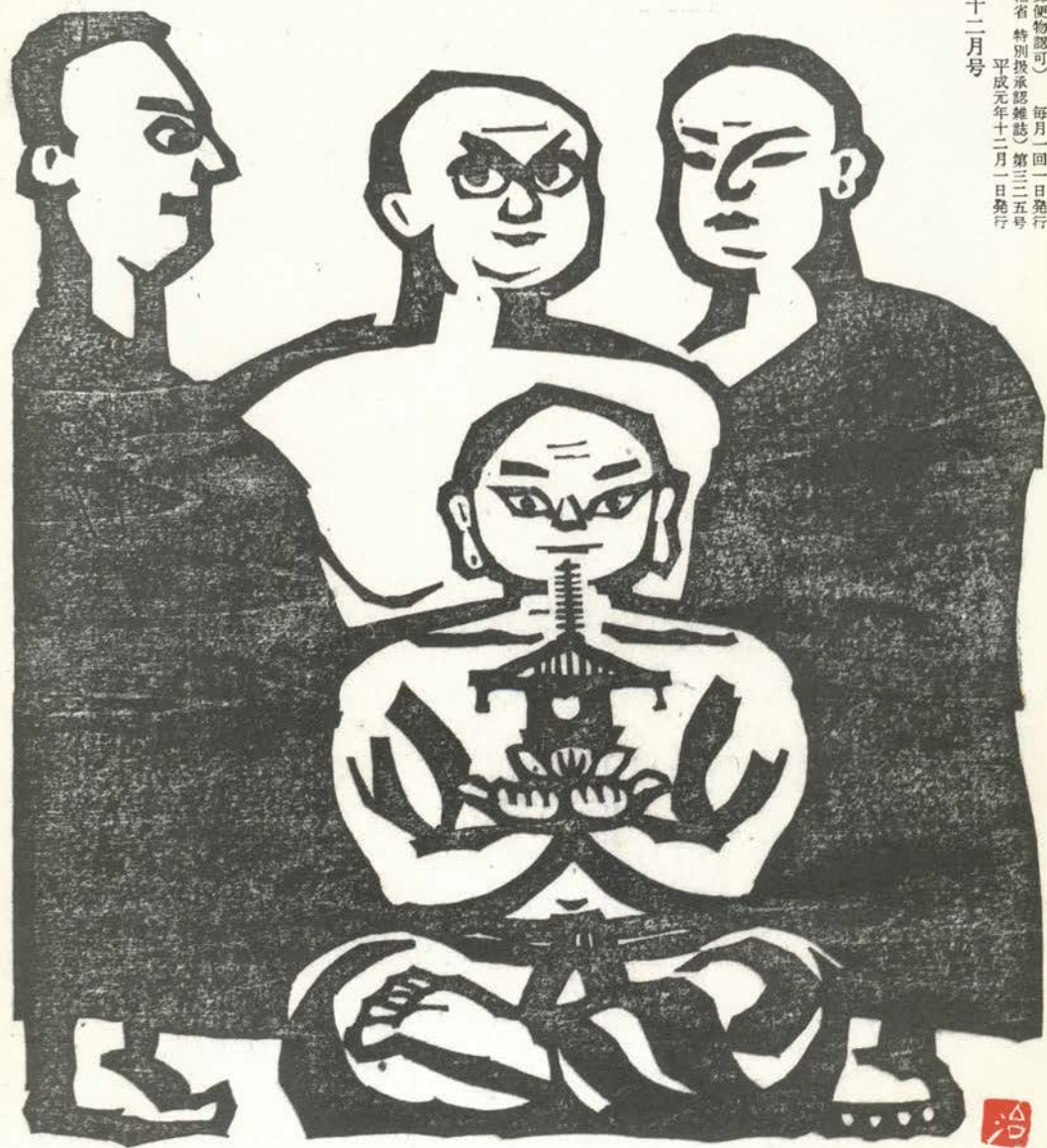


浄土

1989-12

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（逓補省 特別授承認雑誌）第三二五号
平成元年十一月二十五日印刷 平成元年十二月一日発行
第五十五卷 十二月号





十二月の秀句

美しく庭芝枯るるわが齡

富安 風生

枯園に何か心を置きに來し

中村 汀女

枯蓮や水垢見れば流れゐる

水原 秋桜子

十二月号



誠しく往生浄土のねがい、深き心を純(もはら)にする人、ありがたき……。

——『念仏大意』

目 次

法 話

めぐりあいに向う……………平 野 仁 司……(2)

成道会に因んで……………金 子 寛 哉……(10)

◇特別連載◇

両総の在阿〔三〕……………山 本 恭 雄……(19)

＜谷口潮作・短篇小説「みかえり阿弥陀」を読んで＞

悲しみを越えて……………大日方 妙 子……(25)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <33>

海と山の狭間で

——我が思い出に住む犬たち(19)——

……………木 下 隆 一 ……(31)

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(12)

——大僧正岩井智海伝——

……………松 浦 行 真……(38)

表紙絵 小林治郎画

法 話

めぐりあいに想う



平野 仁 司

(座間市宗仲寺住職)

私達は、人の出会いを「一期一会」という
味わい深い言葉で表現しています。この言葉
の響きは実に美しく、同時に人間の出会いが、
たとえ瞬間であっても、この上もなく有りが

たい引き合せの時であるかを汲み取ることが
できます。

私達が何気なくすれ違う人の数は測り知れ
ませんが、一生涯で数百万人にも及ぶとさえ

言われています。ところが、誰でも初めは全くの未知の人であっても、生涯のよき伴侶となったり、かけがえのない友人となる例も少なくありません。

人間の出会いを、純粹に一回のみの出来ごとだと受け止める限り、その出会いは大切なものであり、その機に応じて最善をつくすべきであることが自ずとわかってきます。

年の瀬に当り、ふと此の一とせをふり返りますと、私にも印象に残る数々の出会いがありました。これを通して思われることは、人間には、人間同士の出会いの他に、場所や風景との出会いにも、心豊かな人間性を培う上で、無視できない要素があることがわかります。

七月七日は、天空においては牽牛と織女が

一年ぶりに対面できるというロマンに満ちた日ですが、今夏の七夕の日に何とも不思議な巡り合せがありました。

その日の夕方、川崎市「中野島駅」近くの檀家を訪ねる為に、二子玉川駅からタクシーに乗りました。早速、目にしたのは運転士名の「池田征義」という名前でした。戦時中はよく子供の名前に「征」という字が使われていましたので、もしかと思い尋ねたのですが、私が法衣姿の為か、その方は心をひらかれたのでしょう、自分の生い立ちや今までの人生を運転され乍ら語り始められたのでした。

「昭和十九年、父親は私が生れる二ヵ月前に出征し、すぐに外地で戦死しました。家を出る時、男子出生の折には、「征義」と命名するようにと母に告げたそうです。思えば苦

しい戦後の生活だったことは、幼い自分にもよくわかりました。母子家庭として母の手一つで育てられたのですからそれは当然ですが、私の知るその頃の母は、男の人といつも一緒になってモッコをかついだり、石積みをしたりにしていたものでした。だから、母の手は、ざらざらに荒れていました。夜は、その手で洋裁に励む母のうしろにまわって、小さな手で肩たたきをしたのを思い出します。あまり効果はなかったけれど、これが母にしてあげる最大のプレゼントだったのです。

やがて成人式を迎えた時に、チャンスがあったら早く結婚して母の手に孫を抱かせてやるのが親孝行だと考えました。そして、今から十五年前に縁あって婚約も整い、あと五ヵ月で挙式という時に、母は突然病死してし

まったのです。本当に悲しい別れでした。

私の今までの生涯には辛い悲しい想い出はたくさんあります。しかし、その都度、涙を流さないよう頑張ってきたものです。けれど、今までに二度、大声をあげて泣いたことがあります。母の葬儀が終了し、親戚の人や友人が皆帰って独りぼっちになった時。それでも一度は、やがて結婚して長男が誕生し、病院から退院した帰路、親子三人で母の墓前にぬかづいて、この子があなたの孫ですよ、声を出して報告した時です」

こうして池田さんの言葉はさらに続きました。

「私は出勤したあと、仕事中でも家に帰ることがあります。急いだりした時など、仏壇の両親に朝の挨拶を忘れてしまった時です。

気づいたときには、思いきって家に立ち寄った方が、一日の仕事に精が出せるのです」

池田さんの思い出話は、意外な展開となりました。父母を思う気持ち、出勤前には毎朝、仏さまに手を合せて語りかけて行くという日課としてかたちづくられていたのです。時には引き返してまでも拝むことによって、

一日が安心して過ごせるという訳です。愛する者との別れの悲しみを乗り越えて、安定した境地を開かれている様子が話の折々にうかがえて心なごむ思いでした。乗車中の三十分間の出来ごとでしたが、仏さまに手を合わせる親の心を知っている人が、こゝにも発見できたという喜びが私の脳裏を走ったものでした。

「とても素晴らしい話をありがとうございます

ました。座間から来た甲斐があります」と礼を述べますと、

「座間ですか。七年前の夜、東京の渋谷からお寺の住職さんを送ったことがありましてね。夜道をずっと一時間、仏教の話を聞かせて貰ったことを覚えています」

車中で何度か、仏教の話をした事がありまして、その寺の所在や様子を尋ねますと、拙寺・宗仲寺であったのです。全く信じ難い思いをいたしました。その日が、七夕の日でしたから尚更でした。

人はみな、どこかでだれかと結ばれているのです。「一期一会」の人生の中で、再び巡り合うことも稀ではなかったのです。この時ほど、人の出会いの不思議さと、めぐり合いの大切さが身に沁みたることはありませんで

した。

ようやく秋風が立ち始めた九月中旬、鎌倉の大本山光明寺からの帰りに、神奈川県立近代美術館に足を向けてみました。ちょうど、明治初期に、日本の洋画壇に異才を放った松岡寿という人の回顧展が開催中でした。松岡寿は、川上冬崖の主宰する洋画塾に入門。やがて、明治九年に創設されたばかりの、日本最初の官立美術学校の工部美術学校に入学、そのイタリア人に師事して渡欧。その作品をみると維新後の近代文明の夜明けの時期を迎えた東京の、のどかさが漂う街頭風景の数々でした。その作品の中で、思わず足を止めたくなった素描が目に入って来たのです。「芝・

増上寺霊屋」と「芝増上寺・徳川廟」です。静かなたたずまいのこの光景を通して、懐しい感慨が去来したのでした。

思えば私が、大正大学在学中のことでした。浄土宗僧侶になる為には欠かせない加行(けぎょう、伝宗伝戒道場)に参加しました。その行は厳寒の二月、三週間にわたって増上寺で行なわれましたが、当時は、戦後の混乱期にあり、さしもの徳川家や静閑院宮の墓所も夏草が立枯れ、散然と荒れ果てていた頃でした。荒涼とした光景でしたが、行僧の私共は、昔の栄光をしのびながら、墓参をしたものでした。

時代も移り、今ではそのあたりは、東京プリンスホテルとして全く様相を変えています。が、私にはあの時の墓参の思い出は、今でも心の中から消え去ることはありません。あの

時、荒漠とした墓所にかける冬の陽を眺めながら、歴史も人間も、文化財も、戦火は一瞬のうちに空しくしてしまふものだな、という言い知れぬ淋しさを味わったことが、今回の個展に展示された素描を通して喚起されたのです。絵画を通じて、思いがけないめぐり合いが出来て感謝の気持ちを心して帰路につきました。偶然のことゝは言え、こうした個展に出会えたのも、きっとみ仏のお導きだと思つたものでした。

年の瀬も押しつまって来ますと、一般的な考え方として、面倒なことや、古いものをすっかり断ち切つて、新しく出発し直そうとする傾向があります。けれど、新しい年を迎えるからと言って、記憶や精神的なもののまでも断ち切つてしまふ訳にはいきません。むしろ

新旧のかかわりにもっと深く心を傾け、調整を計るほうがよいのではないでしょうか。新しいものがよいのは、古いものがあつてこそ対比出来るのであつて、新しいばかりに目を奪われて、その流れに流されないようにしなくてはいいけないのです。

般若心経は、「観自在」という言葉で始まっています。「自分の存在を観る」ことからこの経は教えています。人は一様に、他に対する見方は鋭くても、一番大切な自分への見方や調和が疎かになるものです。今の自分の姿と、歩み来た足跡をしっかりとみつめたいものです。

年の瀬の際に、除夜の鐘の音に耳を傾けながら、百八の煩惱の一端をふり返れる人は幸いです。心の調整が出来ていれば、我が心を映

せるのです。煩惱を追い出すという発想よりも、人の道に合った人間らしい生き方をするには、どうしたらよいかと、自問自答するひとときが、年の瀬に与えられているのではないでしょうか。念珠の玉のように、丸味があり、結ばれた絆のように振舞える新しい年を思い浮かべるのも楽しいことです。人はみな、結ばれているのだ、という認識から出発して、はるかに流れ来た歴史の意味を感じ、そこに介在する自己を知れば、寒風に揺れる枯枝にも心を寄せたくなるものです。

師走の街に、今年もまた年末助け合いの運動の声が聞こえます。この機会に、お互いに出来る限り心を拓いて、大勢の人々との新たな結びつきを計りたいものです。人間の及ばないことは、み仏の力におすがりすればよい

のです。

わが浄土宗祖・法然上人は、

雪のうちに仏のみなをとふれば

つもれるつみぞやがてきえぬる

とおっしゃっています。雪は降るな、と願っても降り止みません。罪は、心ならずも犯してしまう。雪は積もってもやがては消えますが、罪は自然に消えることはありません。こんな時、み仏の名をお称えて救っていただきましょう。沢山の思い出の行き交う年の瀬を、どうぞ有意義にお過ごし下さい。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の實踐をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

法 話

成道会に因んで

金子寛哉

(大正大学講師)

(一) はじめに

師走に入ると同時に禅宗寺院の僧堂では臘ろう八接心きつしんがはじまる。僧堂によっては十二月一日から八日の朝まで昼夜を分たず、不眠不休で集中的に行なうかなり厳しい行である。「臘八」の「臘」とは「臘月」であって、即

ち十二月のことであり、「八」は八日のことである。「接心」は坐禅を意味する。つまり、十二月八日釈尊が仏道修行を完成して悟りを開かれた日に因んで行なわれる坐禅修行のことをこのように言うのである。このように釈尊が悟りを開かれた時の修行に因んで、その遺徳をたたえ、報恩の意を込めて行なうのが、この接心であり、その行の終了後に行なう法

会を成道会と言うのである。

かつての臘八接心はまさに不眠不休であったが、現在では数時間の睡眠を認める所もあるといわれる。しかし、浄土宗寺院で育った私には残念ながらその経験がない。その為かどうか、先年印度の仏蹟参拝に行き、ブツダガヤの大塔下にある金剛宝座(釈尊成道の坐所)をお参りした時も、中国の善導大師の雁塔をお参りした時程の感激がなかった事を思い出す。しかし、良く考えて見ると、浄土の教えも、その他の仏教各派の教えも詮じ詰めると全てが釈尊の成道というこの一事に集約されて行くことになる。今日、仏教若しくは仏教教団、そして仏教經典とは何かと考えた場合、それらの根元となる釈尊の成道そのものの持つ意義と、その内容を改めて問い直して見る

ことが必要ではないかと思われる。

(一) 成道とその内容

辻村玄瑞氏作の「成道讃」には釈尊の成道について次のように詠われている。

一、ヒマラヤの峰 雪白く

尼蓮禪河の水清し

釈迦牟尼世尊は 六年の

苦行を捨てて 草を踏む

二、決意も固く 金剛座

降魔の利剣 ふるいつつ

求道の心 ひとすじに

四十と九日の おん思惟

三、ニルワナの星 輝きて

師走八日の 朝まだき

南無仏の聲 高らかに

仏陀となられし 尊とさよ

四、ああ大聖の 大悲願

世のみ光と 輝きぬ

讃えまつらん おん悟り

讃えまつらん 成道會

この和讃で詠われているのは、言う迄もなく、釈尊が出家してのち、六年間の苦行を捨て、その苦行のみによつてはついに悟りの境地には到達出来ないのだということに気づき、菩提樹下に坐して正覚を得、その悟りに基づく教えを説いた遺徳を讃歎したものである。

さて、成道についてであるが、この意味を尋ねて見ると「得道」「成仏」「得仏」「成正覚」「成等正覚」「さとり」「さとりを聞くこと」等と種々に表記されている。しかし

これ等の説も「菩薩が修行円満して無上道を成ずる」ことという中に全て含まれるように思われる。釈尊が悟りを開くにいたる迄の様子を『増一阿含經』第二十三には次のように記している。

是の時我れ復た是の念を作す。過去久遠恒沙の諸仏成道の処は何れの所に在りとせんやと。是の時虚空の神天住して上に在りて我に語りて曰はく、賢士当に知るべし。過去恒沙の諸仏世尊は道樹の清涼なる蔭下に坐して成仏を得たりと。時に我れ復た是の念を作す。何の処に坐して仏道を成ずることを得とせんや。坐せりや、立てりやと。是の時、諸天復た来りて我に告げて是の説を作す。過去恒沙の諸仏世尊は草葉に坐し、然る後に成仏すと。是の時我れを去る遺か

らず吉祥梵志あり、側にありて草を刈る。

…中略…我れ三昧の心清浄にして瑕穢なきを以て有漏つきて無漏を成じ、心解脱し、智慧解脱し、生死已に尽き、梵行已に立ち、所作已に弁じて更に又胎を受けじと。如実に之を知りて即ち無上正眞の道を成ず

と述べている。この釈尊成道の時の様子について他にも多くの經典が様々な形で伝えている。またこの成道正覚の内容を中心にみると、多数ある經典中にも自ずと幾つかの形が見られる。今それらを要約した説を紹介すると

(一)四聖諦、十二因縁等の論理を証得して成道

したとするもの

(二)四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八正道等の修行道の完成によるもの

すもの

(一)四禅、三明の体現によるもの

(二)五蘊、十二処、四大、又は受等の物心現象の如実觀察によるもの

(三)悪魔波旬に象徴される煩惱の滅却によるもの

等である。これらのものがその内容という訳ではないが、ただこれらの中根本となるべき教理や実践は既に釈尊によって自証されたものと思われる。これらの中でも特に注意されるのは後に十二因縁等に発展する縁起説や、四禅等に展開して来る禅定、そして三明中の漏尽等である。

(三) 四魔の克服

これら成道正覚の内容の一事について詳しく述べることも出来ないが、今あげた中の(四)について少しく考えて見よう。釈尊の成道を説く經典中、先に述べた和讃にもあるように降魔^{ごうま}の後に成道するという説は極めて多い。

ただし中には全く降魔に触れずに悟りの事実だけ説くものもある。しかし、釈尊成道の内容を考える上では降魔のもつ意義は極めて重要である。

この成道以前に降伏させた悪魔について見ると仏教では通常「魔」を天魔、死魔、五蘊魔、煩惱魔の四種に分けて考えている。この中「死魔」とは死そのものが厭われ、恐るべきものということから魔といわれ、「煩惱魔」は心中の賊という意味でいわれている。所謂百八煩惱等である。「五蘊魔」の五蘊とい

うのは、色受想行識の個人の心身の構成要素である五要素を指すのであるが、ここでは人間存在そのものを指したものといえる。つまり、この身体そのものが我が身可愛さの為に自分自身を悪道に引き込み、又自らの情愛に引かれて道心を鈍らせ、悪業に及ぶ。それらの全てをさして五蘊魔と呼んだものと思われる。

最後に「天魔」であるが、くわしくは第六天の魔王ともいわれ、実は偉大な神といわれるべき立場にありながら、この神が悪魔と呼ばれているのである。仏教では欲界、色界、無色界の三界をたて、欲界はそこに我々人間の住む所であるが、人間界の上に六種の神々の住む世界があり、それを六欲天と呼んでいる。その六欲天の一番上が「他化自在天」

と呼ばれ、これが所謂第六天の魔王と呼ばれるのである。「他化自在」というのは、他の化作したものを勝手に自分のものとして享受するという意味であって、この天が魔王と呼ばれるのは、それが欲界を支配する王者であるという意味である。欲を基本とし、欲により成り立っている人間が、欲の支配下にある間は欲界の王の下にある忠実な臣下である。しかし、一度道心にめざめて欲心に省察を加え、欲の恐ろしいきずなをのがれ、脱しようとする、この離脱に対して魔王は配下にしておこうとして引き止めようとする働きかけをする。この働きかけが即ち仏伝等に詳しく描写される悪魔の誘惑襲撃である。釈尊が成道以前に悪魔を降伏（降魔）させたというのはとりも直さず以上見て来たような四魔を

克服したことを意味する。

このような降魔の修行が行なわれたのが、前に述べた経文等に見られるように、ブツダガヤの菩提樹下に端座修行した成道以前四十九日（或は七日）間の出来事であったことは言う迄もない。十二月八日の明け方、ニルワナの星（あけの明星、金星）の輝きと共に仏陀釈尊となられたのである。釈尊成道の時期や年令等については種々の説が見られるが、それらの点については省略する。

（四）むすび

以上釈尊の成道を記念して行なわれる成道会と、釈尊成道の意義並にその内容について見たのであるが、このような釈尊の成道を淨

土宗ではどのように受けとり、またどのような意味で成道会を行なっているのでしょうか。浄土三部經の一つである『無量壽經』卷上には、積尊の出家成道について次のように記している。

老病死を見て世の非常を悟り、国と財と位とを棄てて山に入つて道を学す。…中略…哀みて施草を受けて仏樹の下に敷きて跏趺して坐す。大光明を奮つて奪をして之を知らしむ。魔官属を率いて来りて逼め試む。制するに智力を以てして皆降伏せしむ。微妙の法を得て最正覺を成ず。積梵祈勧して法輪を転ぜんことを請す

と述べている。この文が積尊伝の要点を示し、しかもこの中の「微妙の法を得て最正覺を成ず」という文が「成道」を示していることは

これまで述べて来たことから考えても明らかである。同經には、このようにして最正覺を得た積尊が、或る時説法の会座において弟子の阿難と共に次のような問答を行なっている。爾の時、世尊諸根悦予し、姿色清淨にして光顔巍巍たり。尊者阿難仏の聖旨を承けて即ち座より起つて、偏袒右肩し長跪合掌して仏に白して言さく…中略…仏の言はく、善い哉阿難、問ふ所甚だ快し、深智慧を發して真妙の弁才あり、衆生を愍念するを以て斯の慧義を問へり。如来無尽の大悲を以て三界を矜哀す。所以に世に出興して光く道教を聞き、群萌を拯はんと欲して恵むに真実の利を以てす。…中略…如来は定慧究暢して極り無し、一切の法に於て自在を得たり。阿難諦に聴け、今汝が為に説かん。

対へて曰さく、唯然り、願樂がんらくすらく聞きた
てまつらんと欲す

と述べている。右の問答の行なわれた直後に
釈尊が徐々に阿難の願いに答えて浄土の教え
を説き出すのである。つまり、釈尊が成道して
この娑婆世界に出現したのは、仏の「無尽の
大悲」にもとづく「衆生救済の法」、即ち浄土
の教えを説く為であると説いているのである。

浄土教、若しくは浄土宗における釈尊の成
道の受け取り方はこのことに基点を置いてい
る。従って、釈尊の成道と阿難の問いかげが
なければ、少なくとも今日あるような浄土の
教えはあり得なかったことになる。現在浄土
宗では、このことをふまえて釈尊成道の遺徳
を偲おもんでいる。それは成道会の『宣疏せんしよ』に記
される次の文によっても明らかである。即ち

…伏ふくして惟ただるに、如来は常住にして変易へんぎあ
ることなし。菩提樹下の正覺、豈いかでそれ初の
成道ならんや。今その威相是の如く殊勝に、
容顏ようげん此の如く希奇なる所以は、洵まことに是れ無
尽の大愛を以て彼の阿弥陀如来の本願を開
顯し給はんが為なり。嗚呼若し世尊の出現
無くんば、我等大悲の本懷を知るに由なく、
長とこしへに苦海に沈みて出期無かりしならん。
…中略…齊ひとしく無上の宝号を称して歡喜を
舒べ、内省を致し、以て廣大無辺なる慈恩
に酬むかい奉らん事に疑す焉
と述べている。降魔成道を、ただ単に四魔降
伏という内心の省察による悟得に止めず、
その悟得そのものの目的が何であったのかと
いう点に迄深く省察を加えたのが、浄土教に
おける「成道」の理解であったように思われる。

◇◇◇好評増刷◇◇◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒一〇〇一五一 東京都千代田区一ツ橋一―一
TEL (03) 221-0311

◇◇◇特別連載◇◇◇

両総の在阿〔三〕



やまもと きょう
山本 恭雄

(木更津市選択寺住職)

下総国は千葉一族の治するところであった。
千葉氏六代胤政には八子があり、その末子を
千葉八郎胤時といった

胤時の嫡子として元久二年(一一〇五)に生

を受け、のち白井九郎と号して、寛嘉年間
(一二二九―一二三三)父胤時の命により所領下
総国匝瑳郡北条庄鐫木郷に城を築き、鐫木城
と称し、家号鳴矢木かよろぎを号した。

胤定は左京亮に任じ千葉介時胤の御守役を勤めた。宝治元年（一二四七）父胤時が千葉宗



——入道在阿曾像（元鑓木光明寺蔵）——

家に摯居を命ぜられた時に胤定も所領を没収され、父と共に宗家に預けられた。

建長元年（一二四九）の頃胤定は將軍藤原頼朝の命によって改めて父の所領を賜り、鑓木城に居城して千葉宗家の家臣二席となり、千葉介頼胤の宿老として補佐し千葉九郎胤定と号した。

以来子孫が鑓木を名乗り、城主として、原木内、円城寺と共に千葉四天王といわれるようになった。

その頃良忠はこの下総の地にあって教化に専念していた。念仏の聖がこの地に居ることを聞き及んだ胤定は建長六年（一二五四）八月上旬、良忠を鑓木城に招いて浄土の教えを聞いた。

武士の定めとはいいいながらも戦乱の世、一

日として心安まらぬ胤定にとって、浄土のみ教えは心にしみていった。

良忠のために一字を建立することを申し出て、延応元年（一二三九）一寺を建立して、良忠を開基と定めたのであった。これが鑄木山胤定院光明寺である。

良忠は喜んでこの寺に於て念仏の教えを弘め、また著述に励んだ。

胤定は、はしば良忠の講説を聞くに及んで、自分も入道して良忠に帰依し、法号在阿と号した。

良忠は在阿の請に答えて「選択伝弘決疑鈔」を筆にし、更に光明寺に於て「三心私記」、「伝通記」、「決疑抄」など筆をとったのである。

序文にみられる、談話次賓客勸云……とあ

る勸請主たる賓客とは、鑄木城主胤定在阿のことなのである。

「決疑鈔」は、法然の「選択集」を解釈するのにも異説があり、法然、聖光の教えを正しく伝承して異説を避け、正しい教えを伝えようと書かれたものである。

その時良忠五十六歳、在阿五十一歳であった。共に決して若くはなかったが、入道在阿の求道心は若者のように燃えていたのであった。

その後良忠は下総を離れ、鎌倉に赴いたのであったが、「光明寺伝」によれば、

人王八十六代四条院御宇延応元年亥年
地主禪師開山創艸、翌仁治元年子年鎌
倉に至り、十三年後の後、建長五年再

び来て御在住六年より正嘉二年に至る

とあり、良忠は鎌倉に赴いてからも鎗木の地を訪れていたことは、当時の帰依者の極めて多く、また下絵を去り難いものがあったと思われるのである。

鎗木光明寺に伝えられた「古城村誌」追号に、記主禅師の座像消失、鎌倉光明寺に伝わる座像は相似ており、同一仏師の作と思うとある。

胤定は父胤時の弟妹、白居常清佐衛門佐、千田尼北条時頼室、定阿尼記主禅師室とも親交あった。

この胤定が祖先千葉介常胤が鎌倉の館で持仏堂に祀り尊崇した阿弥陀如来像を受け伝えて、鎌倉材木座蓮乗院にそれを寄附したので

ある。

また胤定は、家紋に曾祖父千葉新介胤政が用いた十曜紋を用いたことが、鎗木光明寺に伝えられた胤定御影画像によって明かにされており、常に千葉家の徳風を重んじていたのである。

在阿は念仏三昧の日々に明け暮れして、心安らかに、文永十年（一二七三）癸酉二月十五日、静かに来迎の雲に乗って西方浄土に往かれたのであった。

法号を胤定院殿在阿信仏大徳と溢す。時に六十歳であった。

それは日蓮の竜の口の法難後二年目に当たっている

入道在阿の墓所は今日不祥である。

「香取郡誌」にも、

鎭木字御塚柵田中にあり丘塚を為し

高三尺許の碑石を建つ

往時巨樹ありしが

今斬伐して其影を留めず

伝えて鎭木氏の祖胤を九郎を葬るとなし

或は以て十代胤定を葬るとなす

とあり（十代も又胤定を名乗っている）、その場所も今では台風等のため土砂でその地も埋まりその跡は留めていない。

胤定、胤泰、家胤、祐胤、胤繁、察胤、公永、胤元、胤義、胤定、胤家と十一代に亘って鎭木城に拠った城主の墓所が定かでないことも謎ではあるが、光明寺にもその歴史の中

に今日古いものは殆んど姿を消しているのがあるが、胤定のことについては

「光明寺像起」に、

南北兩条の領主たる鎭木九郎入道胤定郷深く三宝を帰依し、良忠上人之高位を尊崇し静閑を撰み堂宇を建立し上人を教導之師と仰ぎ其身入道して在阿と称し、念仏の行怠るまなし 云々

と記されている。

胤定の居城、鎭木城は千葉県香取郡鎭木に在り、往時は周囲十里余の樺の海の南面して海拔四十五米、東西五百四十米、南北百八十米の台地に築かれた中世の城郭であった。

西方より東方に天守台、二の丸、三の丸か

在り空濠にて区切られ、橋か渡されていた。

附近には、光明寺の他、願勝寺、長楽寺、秋葉神社、正賢寺、将門寺、鐫木大神などの社寺も多いところであったが、今は只往時を偲ぶだけである。

良忠は建長六年の十二月には、同じく千葉一族の推名八郎胤光の招きで匝差飯塚御庄内松崎郷福岡村に移り、聞衆五十余名を集めて約一ヶ月に亘って観経疏を講じている。

推名八郎から坊一字、田一町の寄附をうけ、その坊は、福岡談義所となった。

「玄義分聞書」の奥書には、「建長七年乙卯五月十七日下総国匝差郡御庄福岡郷において談じられ、能化然阿弥陀仏五十七」とあることをみても、福岡談義所は説教所として賑ったところである。

この福岡談義所には、上総周東の在阿も訪れ、良忠の講説を聞いている、しかし近くにある鐫木の地は訪れることなし、ここに同時に良忠に帰依した二人の在阿の出会いはいくつかあったのである。

良忠が周東の在阿の請に答えた、「決答末代念仏授手印疑問鈔」、同じく鐫木の在阿の請に答えた、「選択伝弘決疑鈔」、そのいずれもが、この両総の在阿なくしては、この世に著されることはなかったであらうし、宗義伝灯相伝の一環として、第四問答決択の一間も、在阿の求道心なければ開扉することもなかったであらう。

その意味からも記主良忠上人との邂逅を喜び、二人の在阿を鑽御するものである。

(了)

◇◇ 短篇小説「みかえり阿弥陀」(谷口 潮作)を読んで ◇◇

悲しみを越えて

——『辺境』九号(冬号一九八九・二月)所載——

おおひなた
大日方
たえ
妙子
こ

——去年の冬の初めだった。私はリンパ腫
と言う名の病で……——

先ず目に飛び込んで来たのは、この一行で
した。これは、正しくホジキン氏病ではない
か——。

秋彼岸の墓参の帰りに、

「読んでみなさい」

と菩提寺のご住職(竹中信常先生)に頂いた本
の一頁目です。

二十一才の長男を、ホジキン氏病で彼岸へ送って、もう十五年になります。時が癒してくれたとは言え、愚かな母の脳裏には、一つの言葉、一節のメロディから、当時が鮮やかに浮かび上って来るのです。

文中のK氏と同じく、息子のベッドは、大部屋の一番奥の窓側にありました。

がんセンター四階の窓の下は、堀を埋めた高速道路で、絶え間なく車の走音が湧き上がってきます。向い側には、二階建ての新橋料亭が並び、灯がともる頃から始まるその内側は、別世界のさんざめきであるうと、漠然と眺めました。昭和四十八年、其処がロッキード事件の一舞台であったとは、後で知った事です。今は、病棟も、演舞場も料亭も、高いビルに建て替えられました。しかしながら、たまに

車で高速道路を通る時には、新しい壁面に、古い病棟のあの窓が重なって見えてしまうのです。

焦りと不安と絶望、束の間の緩解期間の喜びとが、交錯する四年間を過したのですが、最後の十五日間は、生死を越えたとみえる穏やかな境地に居て、淡々と、深い愛の眼差しで、毎日通う私を労らってくれました。あれが悟りと言うものでしょうか。

彼は、胸の真中に出来た腫瘍を取った手術後、放射線の照射による潰瘍が片肺の大きさに広がり、恢復不可能なまま、鮮血を吹き上げて一気に逝きました。

五十四才で逝った夫は、永年の飲酒が元でしょう。胃と肝がんで、入院僅か二十日ばかり

りで、どうしても帰ると言い張り、根負けした医者が帰宅させてくれた二日目に、

「背中に手を当ててくれると楽なんだよ」
と言われるまま、さすっている私を突き飛ばす様にのけぞり、その二回目の発作の時、彼の魂が抜け出た！と、私は瞬時に感じました。

息子のベッドの隣りに、小学二年生の良平君が居ました。彼は脳腫瘍で、胸に溜まる液を、管で胃腸へ送り排泄する様な難かしい手術を受けておりました。彼の坊主頭には、照射をする為の印がマジックペンで画かれていました。

瘦せて、顔色はよくありませんが、明るい表情で、四年生クラスの本を次々と読破し、賢い目は、時々悪戯っぽく輝きました。

「来年の春から、学校へ行ける様になるよ」

と飛びはねて、病室は中年が多く、独りだけ若かった息子を、友達の様な話し方で慕っていました。

でも、状態が悪くなり、個室に入ったある秋の日の明け方に、ひっそりと独りでこの世を離れていったのです。

人生は、長短ではなく内容だとは言え、幼くして、又若くして命を絶たれるのは何故なのでしょう。この世の苦しみを、短い修業で終わり、浄土へ行けたのだから幸いなのでしょう。

生ける物の死は、すべて土に返り、無になるのが自然ではないか、本当に浄土が有るの

か、と未だに素直に信じられないのです。

しかし反面、肉親の魂は有ると信じたい矛盾に、戸惑っているのも本当です。

人の死に方は千差万別、自殺以外はそれを選ぶ事が出来ません。何時か来る死を思う時、平穩に過ぎた一日を感謝し、今を大事に生きなくては、と殊勝な気持になるのですが、怠惰な日を重ねる事が多く、あげくには、だから長生きするかも、と開き直ったりしています。そして、自分にはどの様な死に方が与えられるのかと、密かに興味を持っているのは不遜でありましょうか。

或る人にとって、或る仏像は、特別な意味を持つ様です。

奈良興福寺の阿修羅の顔が、アップでテ

レビに写し出された時の衝撃は忘れられません。胸底から、熱い固りが喉元迄押上って来たのです。

それは、闘病中の息子の表情でした。若さと優しさ、愁いと悲しみ、諦めと怒りさえ湛えている。

一度拝観したいと思いつめて、三年前に初めてその前に立ちました。

——やっと御目にかゝれました——

思ったより細身で小さい尊像は、ガラスケースの中に、柔らかな電光を浴びて、たとえ様もなく優しく迎えて下さいました。

時間が止まり、立辣む頬を、果てしなく泪が落ちてゆきます。案内してくれた親友が、側で話す声は耳栓をした様に遙か遠くに響き消えました。

ふと、我に返ると、一諸に居た筈の友も、
若いアメリカ人ツアーの七・八人も消えて、
一人佇ずんでおりました。

次の部屋は、自然の光が窓一杯に差し込み、
背の高い百済観音様が、ユーモラスに大らか
な表情で、

——どうしたの？——

と問いかけるかのように見^み下^さしておられます。
思わず笑みを誘われて、胸の固りが解けて
ゆきました。

外に出ると、初冬の冷気が頭の芯を抜けて、
現実の時間が動き出しました。

私も、一度、みかえり阿弥陀さまを拝みた
いと思います。その時、私はどの様に受け止
め、誰^{どなた}方のお顔と重ねるでしょうか。

◇◇平成二年用新版◇◇

浄土宝暦

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ページ以上 特価60円)

送料実費 (300ページ以上はサービスします)

法然上人鑽仰会

(振替) 東京8-82187

好評

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、
讀重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、発願文、五懺
悔、広懺悔、婦三宝偈、三婦礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降
魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳 浄土

土三部経

B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人

選択集

B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師

観経四帖疏

B6判五八四頁
価三、五〇〇円

和訳 善導大師

六時礼讃

B6判二六五頁
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)

編と訳 村瀬秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜3-8296番

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(19)—

木の^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

試験が終わったら、その足で帰ろうと思っていたのに、風邪をこじらせたりして、ついうかうかと二十日余りも東京で過ごすことになってしまったのは誤算だった。

三原を発つ前から試験の結果は分かっていたから、受からずんば死すとも帰らず、といった悲壮感はなかったが、往きの列車の混雑に先制パンチを喰らった格好で、すっかり意気沮喪してしまっただのが、誤算の始まりだった。博多発の急行「つくし」は、糸崎駅で私が乗車した時、既に超満員だった。文字通り立錐の余地もなかった。通路は言うに及ばず、デッキにも洗面所にも人が溢れ、便所の中にもぎっちり人が詰まっていた。そんな中へ割り込もうというのだから容易なことではない。デッキのステップに片足を掛けた途端、後ろからグイグイ異常な力で押されて、否応なしに車中の人となったが、それきり身動きがとれなくなってしまった。列車の混み具合は噂には聞いていたが、これほどまでに

すさまじいものだとは思ひもなかった。まあ乗ただけで良しとするか——と自らを慰めてみたが、このままで十六時間近くも旅をしなければならぬのかと思うと、のっけから意気沮喪したのも無理はないだろう。ましてや初めての一人旅であった。

暖房代りの人いきれと、車両の揺れに任せて絶えず押しくら饅頭をしていたので、上半身はさほど寒さを感じなかったが、デッキのドアは開けっ放しの状態だったから、寒気は用捨なく下半身を襲い、倉敷を過ぎた頃にはもう完全に冷えきっていて感覚がなかった。超満員にも拘わらず、車内は異様なほど静かだった。私には却ってそれが不気味だった。人々は殆ど声を発することなく、無表情であった。敗戦による虚脱感が長く尾を引いていたのは否めないが、今にして思えば、それは決して時の流れに身を任すといった諦めからきた無表情ではなく、ひたすら耐え忍び、何かきっかけさえ掴めば爆発するエネルギーを秘めた無表情だったのである。そのことは、その年の夏勃発した朝鮮戦争が、はしなくも証明してしまった。連合国の合議で軍備を抹殺されたおかげで、日本は軍事国家に逆戻りするのを免れ、特需ブームによって、経済大国に成長する端緒を探り当てたのであった。

ま、それはともかくとして、暮れてまだ間がないというのに、車窓をよぎる町は、戦災に遭った町も遭わなかった町も一様に暗かった。せめて本でも読めれば少しは気を紛らわすことも出来たであろうが、車内の電灯も暗く、その上身じろぎもままならぬスジ詰め状態ではそれも叶わず、うろ覚えの地図を頭の中に描いて、通過する駅の名を読んで列車の鈍さに焦れ、遅々として進まぬ時計の針を呪った。しかし、窮すれば通ずで、駅名か

らその地につまづく諸々のことを連想する、例えば明石なら明石↓源氏物語、日本標準時
↓子午線↓東経百三十五度、明石球場↓読売巨人軍春のキャンプ、明石中学↓中京商業↓
延長二十五回戦↓夏の甲子園……といった具合に連想の環を拡げて行くと、これは結構暇
つぶしになった。源氏物語からは明石の前という女性の名前と明石入道という親爺がいた
っけ？という辺りで、連想の糸は切れてしまった（ろくすっぽ読んでいないのだから当然であ
る）が、巨人軍や夏の甲子園は連想が連想を呼んで殆どとどまるところを知らず、かなり
時間を稼いでくれた。須磨では平家物語を想い、平敦盛の最期から青葉の笛に想いが及ぶ
と、「一の谷の軍破れ／討たれし平家の公達哀れ……」という唱歌の歌詞がすんなり頭に
浮かんだ。そうなれば「ひよどり越え」の歌に到達するのは、極く自然の成行と言えよ
う。「○○も四つ足○○も四つ足／鹿の通れるこの坂道／馬の通れぬ道理はないと／大将
義経真つ先に」と諳^{そらん}じて、はて○○は馬が先であったか後であったか、確か「馬も四つ足
鹿も四つ足」と習ったような気がするが、修辭的には鹿の方が先なんだよな……と考えて
いるうちに分からなくなってしまう。それにしても、理屈っぽい歌詞だな。こんなのを
大声あげて歌っていたのかと思うと、馬鹿馬鹿しくなって、考えるのをやめてしまっ
たが、以来四十年、どちらが先かについてはペンディングのままになっている。

夜が更けるにつれて、残して来た母のことは少しも気にならなかったが、虎徹のことが
気になってならなかった。夕方駅で別れた時、執拗に私の手を舐めたのは、どういうつも
りだったのだろう。

「おとなしくしてろよ」

と言うと、返事の代りにベロツと頬を舐めたが、ザラツとした舌の感触が、寒気で強ばった頬に甦ってきた。デッキから流れ込んでくる寒気は一段と厳しさを増しており、遠近に名残の雪が光っていたところをみると、月が出ていたのかも知れない。丁度その時、列車は小駅を通過した。関ヶ原だった。

「老蘇おいその森の下草に、駒を止めて顧みる、故郷を雲や隔つらむ。番場・醒井さるがい・柏原・不破の関屋は荒れ果てて、なほもる物は秋の雨の、いつかわが身の尾張なる……」関ヶ原の駅名を見て、ふと太平記の俊基朝臣道行の一節が口をついて出た。「落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の桜がり、紅葉の錦着て帰る、嵐の山の秋の暮」で始まるこの道行の件は、太平記の中でも庄巻で、講釈師よろしく張扇代りにまるめた新聞紙を机に叩きつけて拍子を取りながら読むと、流麗な文章はよく頭に入った。後醍醐天皇の命により、鎌倉討幕の謀議に加わった藤原俊基は主謀者と目され、再度鎌倉へ護送されるが、死を覚悟した旅立ちだっただけに、縁語や掛詞を駆使した文体は、読む者の哀れを誘った。

声に出して言ったつもりはなかったが、私に背を押しつけて立っていた小柄な中年の男が、首をねじ曲げるように振り返って言った。

「太平記だね」

「ええ。……お耳障りで済みません」

ぼそぼそ小声で謝ると、

「いや構わんよ、こちらも退屈してたところだったから」

そう言つて、男は改めて分厚い眼鏡越しに私を見た。父より少し若いかなと思える年格好の人だった。

「大学受験に行くのかね」

「ええ」

「いまどの辺走ってる？」

一瞬、受験勉強の進み具合を聞かれたのかと私はどぎまぎしたが、闇を見透かすようにしている男を見て、

「そろそろ大垣に着く頃だと思います」と言つた。

「あんたが、番場・醒井・柏原・不破の関屋は荒て果てて、と言つていたので、まあその辺りかと目星はついたが……。早いところ『足柄山の嶺より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日数つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ』と願いたいもんだね。もつとも俺はもうちょっと先まで行くがね」

それほど教養ある人には見えなかったが、一字一句間違えずに諳じたのには驚いた。世の中には凄い人がある、外見だけで評価してはならない——というのが、私の率直な感想だった。更に驚いたことには、

「さて、ひと眠りするか」

と言つて口をつぐむと、一、二分も経たないうちに、本当に眠り込んでしまったのであ

る。余程旅慣れた人なんだろうなと思うと同時に、立ったまま眠れるという特技が、私は羨しくてならなかった。

この人は、三原を出てから東京へ着くまでの車中で私が口をきいた唯一の人だったが、横浜で降りるその人には、

「さよなら」

と言うと、

「元気でね、頑張るんだよ」

と、ちょっと手を上げる仕種をして雑沓に紛れて行つた。分厚い眼鏡をかけた小柄な中年の男という以外、これといった特徴のない一期一会の人なのに、忘れ得ぬ人の一人として、今も私の心に深い影を落としている。これは嬉しい誤算だった。

静岡の手前で空が白み始め、沼津で朝日が昇るのを見た時には、さすがにほっとした。雲一つない早春の空が拡がり、一睡もしていない目に碧さが眩しかった。富士駅を過ぎる頃から、富士山はずっと秀麗な全容を見せていた。

列車が進むにつれ、夜は急速に明けて行く。それにつれて、富士山も濃紺から紫へ、そして赤みを帯びた淡い紫に肌の色を変えて行く。半分雪に覆われて、朝日に輝く富士山の姿には、えもいわれぬ美しさがあった。私はそれを飽かず眺めたが、それが誤算だったことを知ったのは、三原に帰ってからであった。富士山を見た奴は試験に落ちる——そんなジンクスがあるというのである。

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』十二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―一八七

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん} 弘^く の 生 涯 (十二)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ} 浦^{うら} 行^{ぎょう} 真^{しん}

その 説 法

岩井智海が、堺の旭蓮社大阿弥陀経寺に移ったのは明治三十一年だが、そのころの布教関係の足跡を略年譜に見てみると、

三十一年 八月 二級巡教使

三十二年 七月 総本山布教使
三十五年 七月 一級巡教使
三十六年 七月 常任布教使会長
といったふうで、力量にふさわしい昇任ぶりだが、実際面でも、ほとんど毎年のように、管長（浄土門主）の地方親化や大本山の法主級の方々の地方巡化に随行を命じられて、それ

らの高僧方の代わりに説法をする、いわゆる「代説」と呼ばれる役目を仰せつかったりしている。

日清戦争の従軍で発揮された説法の才腕は、引き続き重用されていたのである。

しかしのちに、五重相伝の名勸誡師として名を馳せた分野での活躍は、大阿弥陀経寺に伝わる記録「五重授戒結縁寺院及結縁年月日」に見る限り、この三十年代はわずかに総計で十回にしかすぎない。してみるとこの時期は、将来を期しての雌伏の時期だったのかもしれない。

それがみごとに開花してゆくのは、四十年代に入ってからである。明治四十年は四回だが、しだいに八回、十回、十三回と、出演が増えてゆく。

ちなみに、最初の脳溢血で倒れる昭和十一年七月までのその回数を、ここに書き留めて

おこう。興味のない読者はとぼして読んでもらってかまわない。(数字は回数を示す)

〔明治〕▽四十年 四 ▽四十一年 三

▽四十二年 七 ▽四十三年 五

▽四十四年 八

〔大正〕▽元年(明治45) 一三

▽二年 二〇 ▽三年 一四

▽四年 一八 ▽五年 二三

▽六年 二四 ▽七年 一八

▽八年 三一 ▽九年 一三

▽十年 二六 ▽十一年 二六

▽十二年 二七 ▽十三年 一〇

▽十四年 一三

〔昭和〕▽元年(大正15) 一一

▽二年 一四 ▽三年 八

▽四年 一六 ▽五年 一四

▽六年 一〇 ▽七年 一七

▽ 八年	一三	▽ 九年	一三
▽ 十年	一八	▽ 十一年	四〇

これをさらに、地域で分類すると、つぎのような展開となる。(県単位。ないところは省略)

▽ 北海道	八	▽ 秋田	五
▽ 群馬	一	▽ 埼玉	二
▽ 東京	八	▽ 神奈川	五
▽ 長野	八	▽ 新潟	二
▽ 福井	二	▽ 岐阜	三
▽ 愛知	八	▽ 三重	六
▽ 滋賀	二九	▽ 京都	四五
▽ 大阪	一〇一	▽ 兵庫	二〇
▽ 奈良	五	▽ 和歌山	六
▽ 島根	二	▽ 広島	二
▽ 山口	二一	▽ 愛媛	三
▽ 福岡	一二〇	▽ 佐賀	六

▽ 長崎	八	▽ 熊本	一五
▽ 大分	六	▽ 宮崎	二
▽ 鹿児島	二		
▽ 朝鮮	一二	▽ 満州	三
▽ 不明	一二		

当時の岩井の説法ぶりがどんなものであったかを知るすべは何もないが、二、三の人の気憶に残る後年の語り口から察すると、それはどうも座談調のものではなかったらしい。あらかじめ「て・に・を・は」までそらんじてしまった全段を、あたかも朗読するがごとく一つのリズムにのせて、聴聞者の心にしみこませてゆく、といったていのものであったようだ。

これは当時の仏教界の、説法にかんするものとも正統派的な話法の形態であった。この物語の始めの部分にも記したように、幕末か

ら明治にかけて、九州を核として全国にその名説法ぶりを謳われた真宗西本願寺派の七里恒順も、開演の二、三十分前から独り静かに端坐して心を鎮めるとともに、当日の説法の構想を整え、さらに諳^{そらん}じた部分を反芻^{はんそう}して備えたというから、彼も同じ正統話法の人であったのであろう。岩井はその七里に感化をうけるところが大きかったのだから、それを継承したとしても不思議はない。

説法の歴史について、吉澤堯洲は岩井話法を中心に、つぎのように語っている。

『東の方のことはよく存じませんが、明治から大正、昭和にかけて、西の方の名説教師として高名であったのは、ここ（京都・正林寺）の先々代大門了康僧正、そのお弟子の神居琳応僧正、それからおたずねの岩井僧正ですね。さらに川井梁

定^(注1)さん、金田戒定^(注2)さん、林隆碩^(注3)さん、そういうそうそうたる方々ですね。

その岩井智海大僧正の系統を引いていますのが白川観寿さん。大和のお方で、非常にいいお話をなさった。この白川さんは結局、岩井さんの話法をとられた方ですね、お話ぶりから声から。非常にきちっとした声でやられました。

この白川さんの後の系統を引いているのが野島宣道さん。白川さんのご親戚で、法縁でもありました。この方は非常にわかりやすいお話をされた。大和言葉を使って「そうと違いますか」とか「そうですやろ」というふうにおやりになるから非常に親しみがもてる。聞いている者は皆が、「あの人は本当の話をしやはる」と言いましたね。

この方あたりから、布教の方向が変わ

ってきたんです。ですから岩井大僧正の教化というものは、結局、白川観寿さんによって受け継がれて、それが野島さんによってもう一つ柔らかくなっていたと思う』(吉澤堯洲談話)

してみると対話風というか、座談調の説法の歴史は比較的新しく、戦後において主流となっていたものとみることができる。

オーソドックスな岩井説法では、全段すべてを頭の中にしまい込むのが大仕事であった。前の宗議会議長で、岩井が長崎の大音寺に住職をしていた頃その大音寺に書生として住み込み、そこから中学に通っていた三宅春光によると、岩井は「原稿にこだわってはいかんが、しかし一応は作らにゃいかんものだ」といいながら、当時のカネで五銭くらいの小学生の使うノートに、鉛筆ではなく、硯に墨を

すって筆で、きちんと書きしたためていたそうである。

問題は、それからだ。書いた原稿を片手に、廊下を行きつ戻りつしながら、一字一句もおろそかにすることなく、頭のなかにたたみ込んでゆくのだ。

宇治の平等院の高橋真了は、布教界の宿老といった立場にある人物だが、

『岩井さんが知恩院の管長さんをしていらっしゃったとき、われわれが輪番なんかで泊まっておると、廊下をお説教の文句を口ずさみながら歩いておられる場面に、よくぶつかりました。初めは何をしておられるのかよくわからず、私どもは「おや、廊下の運動会か」といっておったんですが、口のなかでブツブツ言っておられるのがわかって、あッと思った。

そういうふうに布教にすべてを傾倒して
いらした方ですよ』(高橋真了談話)

と、岩井の説法原稿を暗記する現場に立ち
会った、数少ない一人である。(高橋師は正確
には平等院塔中の浄土院住職。平等院は天台宗との
共同管理となっている)

じつをいうと筆者も、時おり話を頼まれる
ことがある。しかしいまだかつて話の原稿と
いうものは書いたことがない。ただ、テーマ
にそって話の順序をメモしたものを、携帯す
るだけであつた。それが「伝弘の生涯」を書
くことになって、この天才的な名勸誠師の事
跡を追ううち、ふと原稿を書き、丸暗記する
という「離れ技」を見習ってみたくなって、
やってみたことがあつた。

するとこれが、意外にできた。

初回は原稿と首っ引きみたいないところがあ

つたが、二度目はそれが半分以下に減り、三
度目はさらにその半分ほどに激減して、四な
いし五回目には、時々詰まりながらも、おお
むねやり終わらせることができた。なるほど
と筆者は膝を打ったが、しかしこれには大変
な努力と根気と時間が必要なことも、併せて
悟らされた。

そしてそのときに知ったのだが、このやり
方の最大の長所は、自由自在に、いつでも、
どこの個所でも、メリハリをきかせることが
できるということであつた。聴衆にダレを感
じたら調子を高めて引き締めればいいし、長
い緊張のあとなら、すこし手加減を加えて弛
め、ほぐせばいいのである。語りものの話芸
が、この延長線上に成り立っているわけも、
よく了解することができた。完成された作品
においては、緩急ともにすでに定式化されて
いることから察しられるように。

これらは筆者が体験から割り出した一種の理屈だが、岩井の場合にはさらにこれに、天性の美声が加わる。

これについては児童文学者の高橋良和によると、

『声はアルトでしたよ。高かった。あの人は音楽学校でバイオリンだけじゃなしに、歌も相当、歌わはったんでしょな。語りではあるんだが、それがじつに音楽的だったのだから。これが聴衆には快いんだね。アルトだから女性向きの声です。だから女の人が聞いてホロッとするのはわかるんだが、男が聞いても良かった。というのは、音楽的だったからです。そんなだから、みんなが岩井説教を一語一語、聞き漏らすまいとして耳を傾けた。

ウケたね、あの説教は。声はいいし幅がまたよかった。作法が厳格でしょ。だから威風堂々としてね。ひょっと見たら、法然上人みたいな感じ、するわ。やっぱし第一人者だな』(高橋良和談話)

ということになるのである。高橋は先だつて物故したが、これはその死に先立つ二ヵ月ほどまえ、枕頭に座した筆者に、一種の詠嘆をまじえながら、岩井智海について語ってくれた一節である。

いみじくも高橋は岩井の説法を、「声・恰幅・作法」に「内容」を加えて称揚したが、説法はまさにこれらを総合したうえに成り立つ教化手段なのであった。

声については一応、高橋良和談話で充足されたとして、他はどうであったのか。

これを具体的にみてみることにしよう。
まず、内容についてだが、吉澤はこう語った。

『昔からですが、対機説法論というのがあります。相手にむかって話をするんだから、集まった人びとの知識や性質、能力に随って説法せよ、つまり機にしたがって回導^{めぐど}してゆくということ——これは布教の上で一番大切なことですが、岩井大僧正は確かにこれをよくおっしゃいましたね、教化・伝道の基本であると。これの実践にあたってですが、大僧正はこれについては持論をお持ちでした。その第一に置いておられたのは、「私が説教してやるねん」という気持でやってはいかん、まずこれを捨てろ、というものです。そして、人間という者はこういうものでありますよと説いて聞かせる

——これを主眼とせよということを、やかましく言われた。

それから第二には、自分の体験を中心に語れ。これが非常に大切だと、これもやかましく言われましたね。本で読んだとか人に聞いたとかではなしに、体験ならば力強く話ができる。聴衆はそれになりたい感銘をしてくる、ということですね。

同じことなんですが、以上をさらに敷衍^{えん}していくと、かりに知識や教養のあまりない方、そういう方が聴衆の場合は特に、日常生活ですね、身近なことを話す。つまりナマの話を中心に話をすすめてゆくわけです。これが大切だと。

第三は、知らんことはどこまでも知らんと言えということですね。お説教にゆくと後で質問がでます。それに対して、知らんことを知ったふりして答えると、

大失敗するぞと……。

それについての面白い一つの例ですが、京都のある大学の先生が東北へお話に行かれた。終わって司会者が「何なと質問を」と聞いたときに青年から「先生、南無阿弥陀仏とはいったいどういうことですか」。すると博士、「阿弥陀仏は西におられるのであって、南にはおられないということです」。

これでその日の講演はむちゃくちゃになっちゃった。

それからまたこれは大正時代、たいそうデモクラシーが流行したときに、九州のある寺院の授戒会に招かれた布教師が、デモクラシーについてとうとうと一時間も話された。すると受者についている青年僧が「そんなことを聞くために授戒についたのではない。釈尊の建てられた道

徳とはどんなものかを聞きたいからきたのに、こんなことでは明日からの授戒はお断りにさせてもらおう」……。

これは岩井大僧正からの直^じにお聞きした例話ですが、五重とか授戒とかの場合、そんないらんことを言う必要はない。浄土宗の五重相伝とはどんなものか、それを受けたらどうなるのか、それをはっきり受者に示してゆくことだ。私も知ってますといわんばかりに社会の風潮に便乗する布教師がいるが、いかんことだと、諄々^{じゅんじゅん}と言われたことを、私はいまだに覚えておりますね。

もちろん岩井大僧正が、現代の勉強は必要だと言われたわけではありませんよ。逆に、体験を語るには体験を豊富にしなければいかん。それには修行が大事だということと同時に、現代はどういう

ふうに動いているかもよく勉強する必要
があると。ただそれは腹にしまって表に
だすな、そういうお考えだったと思いま
す。そういう意味では、生涯教育、とい
うお心持ちで言うておられたと思いま
す』(吉澤堯洲談話)

浄土宗の教えを相伝相承させるという大役
を担う布教使が、正しい宗学・宗乗を正確に
頭に入れておかねばならないことはいう
までもないが、岩井はこと説法に使うとな
る、どんな些細な事項でも、ゆるがせにする
ことがなかった。

布教界の重鎮として知られる梶原重道は、
大阿弥陀経寺とは一キロと離れていない超善
寺の住職だが、組が同じ堺組ということだけ
でなく、両寺が法類だった縁もあって、京都
の仏教専門学校(現在の仏教大学)を卒業し龍

谷大学に入った昭和七年、折りから岩井も清
浄華院の法主に就任したので常侍局に入り、
そこから龍谷に通った人物である。

その梶原が語るところによれば、

『あるとき、もう何であつたか忘れま
したが、言葉と物語を書いた紙を渡され
ましてね。出典を調べてこいというわけ
ですよ。それで龍大に行っていましたから
図書館にこもって大藏経を難儀して調べ
た。けれどもなかなか見つからん。なん
でこんなもの調べにやならんのだろうと
思いながら、今度は仏専(仏教専門学校)
に帰って旧師に聞いて、やっとわかった。
やれやれと思ひまして、ずっと書きあげ
て持ってゆきました。

そうしたらていねいに読んでね、「う
ん、これで助かった」いうてね、喜んで

下さった。きつと典拠をつかまれたんでしょうね。だいたいにおいて岩井さんの話には、出典のはっきりしたものが多かったと思います。わからないものはあまり使われなかった』(梶原重道談話)

ざつとこんな具合なのである。(つづく)

- (注1) 川井梁定(一八五九～一九三二) 戦前の布教界の重鎮。大阪の商家に生まれ、京都北野の西正寺・督誓湛梁の弟子に。七五年上京し深川靈巖寺の梁誓観定に宗学を修め、翌年西正寺住職となった。本部巡教使、軍隊布教使として活躍、敦賀の西福寺住職ともなったが、晩年は西正寺に帰り、幾度びか本山法主に擬せられたが固辞し布教に専念した。
- (注2) 金田戒定(一八五九～一九三四) 近世布教界の重鎮。大阪北区北森町に生まれ、近くの智沢寺・金田常全の弟子に。の

ち東都増上寺で温誓大宣から宗戒兩脈を相承した。のち京都府下の兩讃寺、青林庵住職に。愛山護法の念厚く、とくに時勢に即応する布教と講学に専念した。

(注3) 林隆碩(一八八四～一九七二) 近代浄土

宗の代表的布教家。愛知県高浜市生まれ。七歳で三河法榮寺・林碩応の弟子に。大正大学の前身宗教大学に学び、のち請われて布教講習所所長となり、知恩院執事長、同布教師会長などを歴任。雲介子関通をしのび円成寺に入山、布教界の重鎮として活躍した。

(注4)

アルトは女性の最低音域を表わすが、男性のテノールよりは高いので、本来「高い」という意味をもつこの言葉が充てられた。オペラの合唱ではソプラノ、アルト、テノール、バリトンと高い順に置くが、ソプラノに次ぐので次高音の意味も持つ。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 十二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年十一月二十五日

印刷

平成元年十二月一日

発行

編集人 宮林昭彦

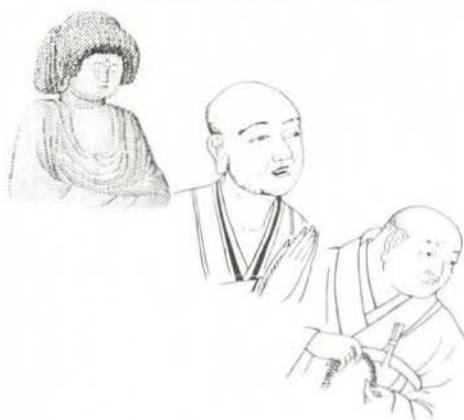
発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番



教え・しきたり・行事の解説書〔日常勤行式付〕

仏事と信仰生活・浄土宗

宮林雄彦 編

●B6版並製
●百四十二頁
●定価八百円 (送料二〇〇円)

本書は浄土宗檀信徒の信仰生活のための手引書である。内容は仏壇のまつり方や礼拝のしかたをはじめ、浄土宗の教え、浄土宗の年中行事などを多数のイラストや写真を用いて解説する。

【目次】第一章 仏教と浄土宗の教え
①仏教の教え／②仏教の流れ／③浄土宗の教え／④念仏信仰の真髄／⑤寺参り墓参り／第二章 日々の信仰生活
①お仏壇／②お仏壇への礼拝のしかた／③その他、仏壇・仏具、お墓参りの注意／第三章 お経・念仏の実践
①日常のおつとめ／②その他のお経／第四章 仏教行事の知識
①年中行事／②葬式と年忌供養／③その他の仏教行事



群書

発行発売 群書 書

〒170 東京都豊島区巣鴨4-7-6-403

発売 続群書類完成会

〒170 東京都豊島区北大塚1-14-6

☎東京(03)917-8411
振替口座 東京7-168759

☎東京(03)915-5627
書店でも注文できます。